A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

27

有島武郎
長与善郎

中央公論社

日本の文学　27　©1967

有島武郎
長与善郎

昭和42年4月5日初版発行
昭和48年9月10日9版発行

発行者　高梨　茂

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　株式会社トーブロ
刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　株式会社トーブロ
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

有島武郎　或る女　351
長与善郎　429
陸奥直次郎　誰でも知っている恥　451

注解 477
解説 本多秋五 488
年譜 509
口絵 「陸奥直次郎」 熊谷守一
挿画 「或る女」 名取明徳
「陸奥直次郎」「誰でも知っている」
「恥」 熊谷守一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo

有島武郎

或る女

一

新橋を渡る時、発車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいえない九月の朝の、煙った空気に包まれて聞こえて来た。葉子は平気でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。そして車が、鶴屋という町の角の宿屋を曲って、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駈けぬける時、停車場の入口の大戸を閉めようとする駅夫と争いながら、八分がた閉りかかった戸のところに突っ立ってこっちを見戍っている青年の姿を見た。

「まあおそくなって済みませんでしたこと……まだ間に合いますかしら」

と葉子が言いながら階段を昇ると、青年は粗末な麦稈帽子をちょっと脱いで、黙ったまま青い切符を渡した。

「おやなぜ一等になさらなかったの。そうしないといけないわけがあるから代えて下さいましな」

と言おうとしたけれども、火がつくばかりに駅夫がせき立てるので、葉子は黙ったまま青年とならんで小刻みな足どりで、たった一つだけ開いている改札口へと急いだ。改札はこの二人の乗客を苦々しげに見やりながら、左手を延ばして待っていた。二人がてんでんに切符を出そうとする時、

「若奥様、これをお忘れになりました」

と言いながら、羽被の紺の香の高くするさっきの車夫が、薄い大柄な*セルの膝掛けを肩にかけたまま慌てたように追い駈けて来て、オリーヴ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡そうとした。

「早く早く、早くしないと出っちまいますよ」改札がたまらなくなって癇癪声をふり立てた。

青年の前で「若奥様」と呼ばれたのと、改札ががみがみ怒鳴り立てたので、針のように鋭い神経はすぐ彼女をあまのじゃくにした。葉子は今まで急ぎ気味であった歩みをぴったり止めてしまって、落ちついた顔で、車夫の方に向きなおった。

「そう御苦労よ。家に帰ったらね、今日は帰りが遅くなるかも知れませんから、お嬢さんたちだけで校友会にいらっしゃいってそう言っておくれ。それから横浜の近江屋——西洋小間物屋の近江屋が来たら、今日こっちから出かけたからって言うようにってね」

車夫はきょときょとと改札と葉子とをかたみがわりに見やりながら、自分が汽車にでも乗りおくれるように慌てていた。改札の顔はだんだん険しくなって、あわや通路を閉めてしまおうとした時、葉子はするするとその方に近よって、

「どうも済みませんでしたこと」

といって切符をさし出しながら、改札の眼の先きで花が咲いたように微笑んで見せた。改札は馬鹿になったような顔つきをしながら、それでもおめおめと切符に孔を入れた。

プラットフォームでは、駅員も見送人も、立っているかぎりの人々は二人の方に眼を向けていた。それを全く気づきもしないような物腰で、葉子は親しげに青年と肩を並べて、しずしずと歩きながら、車夫の届けた包み物の中には何があるかあててみろとか、横浜のように自分の心を牽く町はないとか、切符を一緒にしまっておいてくれろとか言って、音楽者のようにデリケートなその指先きで、わざとらしく幾度か青年の手に触れる機会を求めた。列車の中からはある限りの顔が二人を見迎え見送るので、青年が物慣れない処女のように羞かんで、しかも自分ながら自分を怒っているのが葉子には面白く眺めやられた。

一番近い二等車の昇降口のところに立っていた車掌は右の手をポッケットに突っ込んで、靴の爪先きで待ち遠しそうに敷石を敲いていたが、葉子がデッキに足を踏み入れると、いきなり耳を劈くばかりに呼子を鳴らした。そして青年（青年は名を古藤といった）が葉子に続いて飛び乗った時には、機関車の応笛が前方で朝の町の賑やかなざめきを破って響き渡った。

葉子は四角なガラスを箝めた入口の繰戸を古藤が勢いよく開けるのを待って、中にはいろうとして、八分通りつまった両側の乗客に稲妻のように鋭く眼を走らしたが、左側の中央近く新聞を見入った、痩せた中年の男に視線がとまると、はっと立ちすくむほど驚いた。しかしその驚きは瞬く暇もないうちに、顔からも脚からも消え失せて、葉子は悪びれもせず、取りすましもせず、自信ある女優が喜劇の舞台にでも現われるように、軽い微笑を右の頬だけに浮かべながら、古藤に続いて入口に近い右側の空席に腰を下ろすと、あでやかに青年を見返りながら、小指を何んとも言えない好い形に折り曲げた左手で、鬢の後れ毛をかき撫でるついでに、地味に装って来た黒のリボンに触って見た。青年の前に座を取っていた四十三、四の脂ぎった商人体の男は、あたふたと立ち上って自分の後ろの*シェードを下ろして、折ふし横ざしに葉子に照りつける朝の光線を遮った。

紺の飛白に書生下駄をつっかけた青年に対して、素性

が知れぬほど顔にも姿にも複雑な表情を湛えたこの女性の対照は、幼い少女の注意をすら挙かずにはおかなかった。乗客一同の視線は綾をなして二人の上に乱れ飛んだ。葉子は自分が青年の不思議な対照になっているという感じを快く迎えてでもいるように、青年に対してことさら親しげな態度を見せた。

品川を過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時、葉子はきびしく自分を見据える眼を眉のあたりに感じておもむろにその方を見かえった。それは葉子が思った通り、新聞に見入っているかの痩せた男だった。男の名は木部孤筇と言った。葉子が車内に足を踏み入れた時、誰よりも先きに葉子に眼をつけたのはこの男であったが、誰よりも先きに眼を外らしたのもこの男で、すぐ新聞を目八分にさし上げて、それに読み入って素知らぬふりをしたのに葉子は気がついていた。そして葉子に対する乗客の好奇心が衰え始めたころになって、彼は本気に葉子を見つめ始めたのだ。葉子はあらかじめこの刹那に対する態度を決めていたから慌てても騒ぎもしなかった。眼を鈴のように大きく張って、親しい媚びの色を浮かべながら、黙ったままで軽くうなずこうと、少し肩と顔とをそづちにひねって、心持ち上向き加減になった時、稲妻のように彼女の心に響いたのは、男がその好意に応じて微笑みかわす様子のないということだった。実際男の一文字眉は深くひそんで、その両眼は一際鋭さを増して見えた。それを見て取ると葉子の心の中はかっとなったが、笑みかまけた眸はそのままで、するすると男の顔を通り越して、左側の古藤の血気のいい頬のあたりに落ちた。古藤は繰戸のガラス越しに、切割りの蛭を眺めてつくねんとしていた。

「また何か考えていらっしゃるのね」

葉子は痩せた木部にこれ見よがしという物腰で華やかに言った。

古藤はあまりはずんだ葉子の声にひかされて、まんじりとその顔を見守った。その青年の単純な明らさまな心に、自分の笑顔の奥の苦い渋い色が見抜かれはしないかと、葉子は思わずたじろいだほどだった。

「何んにも考えていやしないが、蔭になった蛭の色が、あまり綺麗だもんで……紫に見えるでしょう。もう秋がかって来たんですよ」

青年は何も思っていはしなかったのだ。

「本当にね」

葉子は単純に応じて、もう一度ちらっと木部を見た。痩せた木部の眼は前と同じに鋭く輝いていた。葉子は正面に向き直るとともに、その男の眸の下で、悒鬱な険しい色を引きしめた口のあたりに漲らした。木部はそれを見て自分の態度を後悔すべきはずである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

二

葉子は木部が魂を打ちこんだ初恋の的だった。それはちょうど日清戦争が終局を告げて、国民一般は誰れ彼れの差別なく、この戦争に関係のあった事柄や人物やに事実以上の好奇心をそそられていたころであったが、木部は二十五という若い齢で、ある大新聞社の従軍記者になって支那に渡り、月並みな通信文の多い中に、際立って観察の飛び離れた心力のゆらいだ文章を発表して、天才記者という名を博してめでたく凱旋したのであった。そのころ女流基督教徒の先覚者として、基督教婦人同盟の副会長をしていた葉子の母は、木部の属していた新聞社の社長と親しい交際のあった関係から、ある日その社の従軍記者を自宅に招いて慰労の会食を催した。その席で、小柄で白皙で、詩吟の声の悲壮な、感情の熱烈なこの少壮従軍記者ははじめて葉子を見たのだった。

葉子はその時十九だったが、すでに幾人もの男に恋をし向けられて、その囲みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を楽しませて行くタクトは十分に持っていた。十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女学生界の流行を風靡したのも彼女である。その紅い唇を吸わして首席を占めたんだと、厳格で通っている米国人の老校長に、思いもよらぬ浮名を負わせだのも彼女である。上野の音楽学校にはいってヴァイオリンの稽古を始めてから二カ月ほどの間にめきめき上達して、教師や生徒の舌を捲かした時、ケーベル博士一人は渋い顔をした。そしてある日「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と無愛想に言って退けた。それを聞くと「そうでございますか」と無造作に言いながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまま学校を退学してしまったのも彼女である。基督教婦人同盟の事業に奔走し、社会では男勝りのしっかり者という評判を取り、家内では趣味の高いそして意志の弱い良人を全く無視して振舞ったその母の最も深い隠れた弱点を、拇指と食指との間にちゃんと押えて、一歩もひけを取らなかったのも彼女である。葉子の眼にはすべての人が、ことに男が底の底まで見すかせるようだった。葉子はそれまで多くの男をかなり近くまで潜り込ませておいて、もう一歩というところで突っ放した。恋の始めにはいつでも女性が祭り上げられていて、ある機会を絶頂に男性が突然女性を踏み躙るということを直覚のように知っていた葉子は、どの男に対しても、自分との関係の絶頂がどこにあるかを見ぬいていて、そこに来かかると情容赦もなくその男を振り捨ててしまった。そうして捨てられた多くの男は、葉子を恨むよりも自分たちの獣性を恥じるように見えた。そして彼らは等しく葉子を見誤ってい

たことを悔いるように見えた。なぜというと、彼らは一人として葉子に対して怨恨を抱いたり、憤怒を漏らしたりするものはなかったから。そして少しひがんだ者たちは自分の愚を認めるよりも葉子を年不相当にませた女と見る方が勝手だったから。

それは恋によろしい若葉の六月のある夕方だった。日本橋の釘店にある葉子の家には七、八人の若い従軍記者がまだ戦塵の抜けきらないような風をして集まって来た。十九でいながら十七にも十六にも見れば見られるような華奢な可憐な姿をした葉子が、慎しみの中にも才走った面影を見せて、二人の妹とともに給仕に立った。そして強いられるままに、ケーベル博士から罵られたヴァイオリンの一手も奏でたりした。木部の全霊はただ一目でこの美しい才気の漲り溢れた葉子の容姿に吸い込まれてしまった。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。そして運命は不思議な悪戯をするものだ。木部はその性格ばかりでなく、容貌——骨細な、顔の造作の整った、天才風に蒼白い滑らかな皮膚の、よく見ると他の部分の繊麗な割合に下顎骨の発達した——までどこか葉子のそれに似ていたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見つけ出したように思って、一種の好奇心を挑発せられずにはいなかった。木部は燃えやすい心に葉子を焼くようにかき抱いて、葉子はまた才走った頭に木部の面影を軽く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終りを告げた。

木部の記者としての評判は破天荒といってもよかった。いやしくも文学を解するものは木部を知らないものはなかった。人々は木部が成熟した思想を提げて世の中に出て来る時の華々しさを噂し合った。ことに日清戦役という、その当時の日本にしては絶大な背景を背負っているので、この年少記者はある人々からは英雄の一人とさえして崇拝された。この木部がたびたび葉子の家を訪れるようになった。その感傷的な、同時にどこか大望に燃え立ったようなこの青年の活気は、家中の人々の心を捕えないではおかなかった。ことに葉子の母が前から木部を知っていて、非常に有為多望な青年だと讃めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかったりするのを見ると、葉子は胸の中でせせら笑った。そして心を許して木部に好意を見せ始めた。木部の熱意が見る見る抑えがたく募り出したのはもちろんのことである。

かの六月の夜が過ぎてから程もなく木部と葉子とは恋という言葉で見られねばならぬような間柄になっていた。こういう場合葉子がどれほど恋の場面を技巧化し芸術化するに巧みであったかは言うに及ばない。木部は寝ても起きても夢の中にあるように見えた。二十五というその

ころまで、熱心な信者で、清教徒風の誇りを唯一の立場としていた木部がこの初恋においてどれほど真剣になっていたかは想像することが出来る。葉子は思いもかけず木部の火のような情熱に焼かれようとする自分を見出すことがしばしばだった。

そのうちに二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に対してかねてからあることでは一種の敵意を持ってさえいるように見えるその母が、この事件に対して嫉妬とも思われるほど厳重な故障を持ち出したのは、不思議でないというべき境を通り越していた。世故に慣れきって、落ちつき払った中年の婦人が、心の底の動揺に刺戟されてたくらみ出すと見える残虐な謀計は、年若い二人の急所をそろそろと窺いよって、腸も通れと突き刺してくる。それを払いかねて木部が命限りにもがくのを見ると、葉子の心に純粋な同情と、男に対する無条件的な捨身な態度が生まれ始めた。葉子は自分で造り出した自分の穽に他愛もなく酔い始めた。葉子はこんな眼もくらむような晴れ晴れしいものを見たことがなかった。女の本能が生まれてはじめて芽をふき始めた。そして解剖刀のような日ごろの批判力は鉛のように鈍ってしまった。葉子の母が暴力では及ばないのを悟って、すかしつなだめつ、良人までを道具につかったり、木部の尊信する牧師を方便にしたりして、あらん限りの知力を搾った懐柔策も、何んの甲斐もなく、冷静な思慮深い作戦計画を根気よく続ければ続けるほど、葉子は木部を後ろにかばいながら、健気にもか弱い女の手一つで戦った。そして木部の全身全霊を爪の先き想いの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとうとう我を折った。そして五ヵ月の恐ろしい試練の後に、両親の立ち会わない小さな結婚の式が、秋のある午後、木部の下宿の一間で執り行われた。そして母に対する勝利の分捕品として、木部は葉子一人のものとなった。

木部はすぐ葉山に小さな隠れ家のような家を見つけ出して、二人は睦まじくそこに移り住むことになった。葉子の恋はしかしながらそろそろと冷え始めるのに二週間以上を要しなかった。彼女は競争すべからぬ関係の競争者に対して見事に勝利を得てしまった。日清戦争というものの光も太陽が西に沈むたびごとに滅じて行った。それらはそれとして一番葉子を失望させたのは同棲後はじめて男というものの裏を返して見たことだった。葉子を確実に占領したという意識に裏書きされた木部は、今までおくびにも葉子に見せなかった女々しい弱点を露骨に現わし始めた。後ろから見た木部は葉子には取りどころのない平凡な気の弱い精力の足りない男に過ぎなかった。筆一本握ることもせずに朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的な癖に恐ろしく我儘で、今日今日の生活にさえ事欠

きながら、万事を葉子の肩になげかけてそれが当然なことでもあるような鈍感なお坊ちゃんじみた生活のしかたが葉子の鋭い神経をいらいらさせ出した。始めのうちは葉子もそれを木部の詩人らしい無邪気さからだと思って見た。そしてせっせせっせと世話女房らしく切り廻すことに興味をつないで見た。しかし心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛抱がいつまでも続こうぞ。結婚前までは葉子の方から迫って見たにもかかわらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だった彼であったのに、思いもかけぬ貪婪な陋劣な情欲の持主で、しかもその欲求を貧弱な体質で表わそうとするのに出喰わすと、葉子は今まで自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられたような不快を感ずにはいられなかった。夕食を済ますと葉子はいつでも不満と失望とでいらいらしながら夜を迎えねばならなかった。木部の葉子に対する愛着が募れば募るほど、葉子は一生が暗くなりまさるように思った。こうして死ぬために生まれて来たのではないはずだ。そう葉子はくさくさしながら思い始めた。その心持ちがまた木部に響いた。木部はだんだん監視の眼をもって葉子の一挙一動を注意するようになって来た。同棲してから半ヵ月もたたないうちに、木部はややもすると高圧的に葉子の自由を束縛するような態度を取るようになった。木部の愛情は骨に沁みるほど知り抜きながら、鈍っていた葉子の批判力はまた磨きをかけられた。その鋭くなった批判力で見ると、自分と似寄った姿なり性格なりを木部に見出すということは、自然が巧妙な皮肉をやっているようなものだった。自分もあんなことを想いあんなことを言うのかと思うと、葉子の自尊心は思う存分に傷つけられた。

ほかの原因もある。しかしこれだけで十分だった。二人が一緒になってから二ヵ月目に、葉子は突然失踪して、父の親友で、いわゆる物事のよくわかる高山という医者の病室に閉じ籠らしてもらって、三日ばかりは食う物も食わずに、浅ましくも男のために眼のくらんだ自分の不覚を泣き悔んだ。木部が狂気のようになって、ようやく葉子の隠れ場所を見つけて会いに来た時は、葉子は冷静な態度でしらじらしく面会した。そして「あなたの将来のおためにきっとなりませんから」と何気なげに言って退けた。木部がその言葉に骨を刺すような諷刺を見出しかねているのを見ると、葉子は白く揃った美しい歯を見せて声を出して笑った。

葉子と木部との間柄はこんな他愛もない場面を区切りにしてはかなくも破れてしまった。木部はあらんかぎりの手段を用いて、なだめたり、すかしたり、強迫までして見たが、すべては全く無益だった。一旦木部から離れた葉子の心は、何者も触れたことのない処女のそれのよ

に迄さえ見えた。

それから普通の期間を過ぎて葉子は木部の子を分娩したが、もとよりそのことを木部に知らせなかったばかりでなく、母にさえある他の男によって生んだ子だと告白した。実際葉子はその後、母にその告白を信じさすほどの生活をあえてしていたのだった。しかし母は眼敏くもその赤坊に木部の面影を探り出して、基督信徒にあるまじき悪意をこの憐れな赤坊に加えようとした。赤坊は女中部屋に運ばれたまま、祖母の膝には一度も乗らなかった。意地の弱い葉子の父だけは孫の可愛さからそっと赤坊を葉子の乳母の家に引き取るようにしてやった。そしてそのみじめな赤坊は乳母の手一つに育てられて定子という六歳の童女になった。

その後葉子の父は死んだ。母も死んだ。木部は葉子と別れてから、狂瀾のような生活に身を任せた。衆議院議員の候補に立っても見たり、純文学に指を染めても見たり、旅僧のような放浪生活も送ったり、妻を持ち子を成し、酒に耽り、雑誌の発行も企てた。そしてそのすべてにいちいち不満を感ずるばかりだった。そして葉子が久し振りで汽車の中で出遇った今は、妻子を里に返してしまって、ある由緒ある堂上華族の寄食者となって、これといってする仕事もなく、胸の中だけにはいろいろな空想を浮かべたり消したりして、とかく回想に耽りやすい日送りをしている時だった。

三

その木部の眼は執念くもつきまつわった。しかし葉子はそっちを見向こうともしなかった。そして二等の切符でもかまわないからなぜ一等に乗らなかったのだろう。こういうことがきっとあると思ったからこそ、乗り込む時もそう言おうとしたのだのに、気が利かないっちゃないと思うと、近ごろになく起きぬけから冴え冴えしていた気分が、沈みかけた秋の日のように陰ったり滅入ったりし出して、冷たい血がポンプにでもかけられたように脳の透間という透間をかたく閉ざした。たまらなくなって向かいの窓から景色でも見ようとすると、そこにはシェードが下ろしてあって、例の四十三、四の男が厚い唇をゆるく開けたままで、馬鹿な顔をしながらまじまじと葉子を見やっていた。葉子はむっとしてその男の額から鼻にかけたあたりを、遠慮もなく発矢と眼で鞭うった。商人は、本当に鞭うたれた人が泣き出す前にするように、笑うような、はにかんだような、不思議な顔のゆがめ方をして、さすがに顔を背けてしまった。その意気地のない様子がまた葉子の心をいらいらさせた。右に眼を移せば三、四人先きに木部がいた。その鋭い小さな眼は依然として葉子を見守っていた。葉子は震えを覚えるばかり

に激昂した神経を両手に集めて、その両手を握り合わせて膝の上のハンケチの包みを押えながら、下駄の先きをじっと見入ってしまった。今は車内の人が申し合わせて侮辱でもしているように葉子には思えた。古藤が隣座にいるのさえ、一種の苦痛だった。その瞑想的な無邪気な態度が、葉子の内部的経験や苦悶と少しも縁が続いていないで、二人の間には金輪際理解が成り立ち得ないと思うと、彼女は特別に毛色の変った自分の境界に、そっと窺い寄ろうとする探偵をこの青年に見出すように思って、その五分刈りにした地蔵頭までが顧みるにも足りない木の屑か何んぞのように見えた。

痩せた木部の小さな輝いた眼は、依然として葉子を見つめていた。

なぜ木部はかほどまで自分を侮辱するのだろう。彼は今でも自分を女とあなどっている。小ぽけな才力を今でも頼んでいる。女よりも浅ましい熱情を鼻にかけて、今でも自分の運命に差し出がましく立ち入ろうとしている。あの自信のない臆病な男に自分はさっき媚を見せようとしたのだ。そして彼は自分がこれほどまで誇りを捨てて与えようとした特別の好意を眦を反えして退けたのだ。

痩せた木部の小さな眼は依然として葉子を見つめていた。

この時突然けたたましい笑い声が、何か熱心に話し合っていた二人の中年の紳士の口から起った。その笑い声と葉子と何んの関係もないことは葉子にも分りきっていた。しかし彼女はそれを聞くと、もう欲にも我慢がしきれなくなった。そして右の手を深々と帯の間にさし込んだまま立ち上りざま、

「汽車に酔ったんでしょうかしらん、頭痛がするの」

と捨てるように古藤に言い残して、いきなり繰戸を開けてデッキに出た。

大分高くなった日の光がぱっと大森田圃に照り渡って、海が笑いながら光るのが、並木の向うに広過ぎるくらい一どきに眼にはいるので、軽い瞑眩をさえ覚えるほどだった。鉄の手欄にすがって振り向くと、古藤が続いて出て来たのを知った。その顔には心配そうな驚きの色が明らさまに現われていた。

「ひどく痛むんですか」

「ええかなりひどく」

と答えたが面倒だと思って、

「いいからはいっていて下さい。大げさに見えるといやですから……大丈夫危なかありませんとも……」

と言い足した。古藤は強いてとめようとはしなかった。そして、

「それじゃはいっているが本当に危のうございますよ……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo